

第10回ローカルサミット in 東近江

ローカルファイナンスが拓く確かな未来

～時間軸と空間軸から100年後のローカルを構想する～

2017.12.1（金）～12.3（日）

【開催趣旨】

ローカルサミットは、今回でついに10回目を迎えます。2008年以来、全国から多くの志民が集い、100年後に目指す真のローカルを実現するには、これまでの効率・成長のグローバリズムの延長線上ではなく、忘れてきているローカルの仕組み等に解決の糸口があることを見出しました。そのためには、場所文化を甦らせ、いのちの原点に立ち戻ることが不可欠であることを認識し、新たな環境・生命文明の構築をめざし、熱く語り合ってきました。

回を重ねるごとに、その議論は深まり、広がり、真のローカルの実現性は一段と増してきました。環境省と一緒に国民運動展開を鋭意進めている「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトも、第8回の酒田・庄内大会において「庄内独立宣言」として取り上げられ、昨年第9回の倉敷おかやま大会では、高梁川といういのちを育む水の流域を舞台に、子ども達が主役となった一流の地域づくりを実現するため、大人達が今を変えることに勇気を持って行動するという宣言に結実しました。同時に、自然との共生に基づく地域の自立・循環を将来にわたって支えていける、従来のお金の流れとは一線を画する、参官学金民協働での温かなローカルファイナンスの必要性も強く共有されてきました。そして今回、これまでの我々の取組みをトータルに、具体的に、皆で描き出す時期に至ったと認識しています。

今回の第10回の開催地となった、この東近江市は、鈴鹿山脈から琵琶湖に広がる広大な地に、古くから人々の暮らしが息づき、多彩な地域文化が培われてきました。とくに、自らの地域は自ら守り築くという、中世惣村の自治精神が育まれ、この地から生まれた木地師は、全国に自然と共生する人の在り方を示し、それを追って「三方よし」の商売を広めた近江商人は、人や地域のつながりを大切にしながら、広く公共利益のために貢献する文化を残してきました。このような惣村自治と近江商人に現わされる、広い市民力と渡来人の時代から蓄積された深い文化力を有し、いち早く、2030年の将来ビジョンを描き出しました。さらに、その推進を図るため、全国に先駆けての新たなローカルファイナンス

を具体化した「東近江三方よし基金」を設立しました。長い歴史の時間軸と、流域全体を俯瞰する空間軸から、様々な仕組みを提供してきたこの地から、また新しい具体的な動きがはじまろうとしています。

まさに東近江市は、全国の志民が、それぞれのローカルの未来をトータルに語り合う最適な場所であり、第10回という節目の場所にふさわしい開催となったと思います。第10回という記念すべき時間と空間を皆様方と共有させていただければ幸甚です。

第10回ローカルサミット in 東近江実行委員長 山口美知子

ローカルサミット事務総長 吉澤 保幸